

第二章 生物

第一節 植物

一 植生状況

温帯性植物

川辺町は気候的には、町内を縦断する飛騨川の関係で比較的暖かく、温暖な地域の一つに数えられている。したがって生育する植物は、暖帯性植物の分布が幅広く見られるが、雨量は少ない地域でもある。全般的に一部山岳地帯を除いて広葉樹林が多い。

一般的に低山地は常緑広葉樹林が多く、高地に至ると落葉広葉樹林が発達するといわれている。当地方の代表的な樹林は、アカマツ・カシ・クリなどであり、そのほか植林によるヒノキ・スギも数多く見られる。そしてこれら樹木の下層には、ツツジ類やシダ植物が生育している。

広葉樹林

常緑広葉樹林は、平均気温が一度の地帯まで生育するが、立地的には標高七〇〇メートルまでといわれている。特にツブラジイは丘陵地から三〇〇メートル近くまで、それより七〇〇メートル付近までは、常緑カシ樹林の生育がみられる。

主なる広葉樹林としては、前記ツブラジイに続いて、カシ・ヤブツバキ・クロガネモチがあり、それに針葉樹としてツガ・モミ・アカマツ・スギが混生している。落葉樹としてはヤマザクラ・イロハモミジ・クリなど、低木類はサカキが多く、シヤシヤンボ・センリヨウ・ヤマツツジ、そのほかシダ類も多く生育している。

河辺群落

飛驒川の本流・支流には、岩石の狭あいな場所にサツキが群落して風趣を高めているが、これらは、水流の飛沫などにより群落したものと考えられる。そのほか、ネコヤナギ・カワヤナギ・スナゴケなどのネコヤナギ群落も生育している。これ以外にも、ススキ・ノイバラ・ウバユリなども生育している。

一 植 生

町内に生育する主なる植物を、便宜上松柏類・双子葉類・单子葉類・隠花類に分類すると次のようになる。

松柏類 クロマツ・アカマツ・スギ・ヒノキ・モミ・カヤ・イブキ・ゴヨウマツ・イチヨウ・ネズミサシ・キャラボクなど。

双子葉類 クルミ・ブドウ・ツタ・ムクゲ・ツツジ・ザクロ・ドクダミ・ハンノキ・シイ・ケイトウ・ジュンサイ・モクレン・ボタン・アケビ・ナンテン・ボケ・スモモ・アジサイ・レンゲ・アマシヤ・ユキノシタ・キク・ナタネ・ヨメナ・オミナヘシ・ハギ・サンショウ・カラタケ・ミカン・グミ・マンリヨウ・コスモス・アサなど。

单子葉類 キフラン・ニンニク・ラッキョウ・スイセン・アヤメ・ヒガンバナ・ヨシ・スゲ・バショウ・オモト・オモダカ・クワイ・シヨウブ・オニユリ・ジユジユダマ・カルカヤなど。

隠花植物類 ワラビ・シダ・スギゴケ・ゼニゴケ・イブキ・アオミドラ・トクサ・スギナ・ウラジロ・ゼンマイ・
イワヒバ・マツタケ・シイタケ・ロウジ・ネズミタケ・ハツタケ・シメジタケ

第二節 動物

一 動物

地域開発や公害など、その影響は近年飛騨川流域でも否定できないが、まだ他地域に比べて数多くの動物の生息が確認されている。これらの動物のうち主なるものを便宜上、哺乳動物・爬虫類・両棲類・鳥類に分類すると次のようになる。

(哺乳動物)

さる科 サル

ひなこもり科 イエコウモリ・ヤマコウモリ

もぐら科 モグラ

とがりねずみ科 カワネズミ

ねずみ科 ハツカネズミ・ドブネズミ・アカネズミ・ハタネズミ・クマネズミ

りす科 リス・ムササビ

うさぎ科 ノウサギ

いぬ科 タヌキ・キツネ

いたち科 イタチ・テン・アナグマ

いのしし科 イノシシ

(爬虫類)

かめ科 イシガメ・クサガメ・ゼニガメ

やもり科 ヤモリ

とかげ科 トカゲ

かなへび科 カナヘビ

へび科 ヒバカリ・ヤマカガシ・シマヘビ・ジムグリ・アオダイショウ

くさりへび科 マムシ

(両棲類)

さんしょうお科 オオサンショウウオ・ヒダサンショウウオ・ハコネサンショウウオ

いもり科 イモリ

ひきがえる科 ヒキガエル

あまがえる科 アマガエル

あかがえる科 トノサマガエル・アカガエル・ツチガエル

あおがえる科 カジカガエル

(鳥類)

きじ科 キジ・ヤマドリ

わしたか科 トビ・ノスリ・チョウゲンボウ・ハヤブサ

はと科 キジバト・アオバト

ほととぎす科 ホトトギス・ツツドリ・カツコウ・ジユウイチ

ふくろう科 フクロウ・オオコノハズク

かわせみ科 カワセミ・ヤマセミ

きつつき科 アカゲラ・ユゲラ

ひばり科 ヒバリ

つばめ科 ツバメ・コシアカツバメ・イワツバメ・アマツバメ

せきれい科 キセキレイ・セグロセキレイ

ひよどり科 ヒヨドリ

もず科 モズ

うぐいす科 ウグイス・オオヨシキリ・コヨシキリ

つぐみ科 ツグミ・アカハラ・シロハラ・ノビタキ

からす科 ハシブトカラス・ハシボソカラス・カケス

むくどり科 ムクドリ・コムクドリ
すずめ科 スズメ

二 魚 類

分布 飛驒川水系の魚類は三二種に達するが、このうち川辺水域では三〇種類の魚類が確認されている。アユ・ウ

ナギのほか純淡水魚が多く、コイ科がその半数を占めている。しかし飛驒川在来のものでないモロコ・シマドジョウなどの魚類もあるが、アユ放流のさい混じって侵入したものである。一方、飛驒川のみに生息する魚類としては、ホトケドジョウ・スナヤツメ・キギモドキ・ナマズ・メダカなどがある。

特にアユは、一科一種の魚でほかにアユの仲間はいない。形はスマートで鱗が非常に細かく、背・胸に特徴がある。

河川名 調査地点 種名	飛驒川				備 考
	川 辺	赤 川 (三河)	黒 川 (中津)	白 川 (五加)	
スナヤツメ	○	○	○	○	
マ ス	○	○	○	○	
ア マ ゴ	○	+	+	○	
ニジマス	○	○	○	○	放流
イ ワ ナ			○		
ア ユ	≡	≡	≡	≡	放流
ワカサギ	○				放流
タモロコ	≡	○	+	○	
ヒ ガ イ	○				移植種
ニ ゴ イ	≡				
カ マ ツ カ	≡			○	
ゼ ゼ ラ	+				
モ ツ ゴ	+				移植種
ウ グ イ	≡	≡	≡	≡	
アブラハヤ	≡	+	+	+	
カワムツ	≡	≡	≡	≡	
オイカワ	≡	≡	≡	≡	
ハ ス	○				移植種
コ イ	+	+	+	+	放流
キンブナ	○		+	+	
ゲンゴロウナ	○	+	+		放流
ヤリタナゴ			+		
ドジョウ	+	+	+	○	
シマドジョウ	+	○	+	○	
ホトケドジョウ			≡		
アジメドジョウ	—	+	≡	≡	
ナ マ ス	+	○	○	○	
ギギモドキ	○	≡	○		
ア カ ザ	+	≡	≡	≡	
ウ ナ ギ	+	+	+	+	
メ ダ カ	○			○	
ス ズ キ					
ヨシノボリ	○				
カワヨシノボリ		≡	≡	≡	
カ ジ カ	—	+	○	+	
種 類	30	21	25	22	

飛驒川下流魚類分布一覧表

「飛驒川史」による
○生息・≡多数・+普通
—少数・空欄不明

生態は海で稚魚期を過ごし、川をさかのぼって成長する。水あかを食物として急速に大きくなり、一年で産卵して大部分は死んでしまう短命魚である。香りのある味は淡水魚の王として賞味されている。

川辺ダム湖

川辺ダムは飛騨川水系の最下流に位置するが、同水系では大型のダムに属している。ゲート近くの中
央部では水深二〇メートルに達し、上流にいくにしたがつて浅くなっている。河底は砂・レキが多く、泥底は比較的少ない。

このダム付近は水量が豊富で、しかも水がよく澄み、河底の大部分は砂底・レキ底であり、川岸に沿った部分には泥底が見られる。ダム内の支流の落ちこみには、幾多の淡水魚が群がっている。岸辺に立って湖底を観察すると、ニゴイの幼魚・オイカワ・ウグイ・スゴモロコ・カマツカなどが遊泳していて豊富な魚類が見られる。ダムのえん堤から約二〇メートル上流には、二つの支流が流れこんでいるが、この支流からは、常時多量の有機物が流入し、多数の魚類が群遊している。

ニゴイは全長五〜八センチメートルの二年子が多く、次にオイカワが続いている。この付近はどこを見ても五〜一〇センチメートル大の魚体を多数発見することができるが、この多くはニゴイの幼魚である。えん堤のゲート直下は、コンクリートにより区切られた箱状の淵になっていて、その内外に各種の魚類が生息しているが、養魚槽と同じような形態になっている。コイ・ウグイ・オイカワ・カワムツ・カマツカ・カワヨシノボリ・スゴモロコなどが群遊している。

川辺ダム付近の水系は、清澄な水量と安定した環境に生育する豊富な餌に恵まれ、魚類の発育もよく個体数も多い。いずれにしてもこの付近は水が清澄で河底も安定しており、餌が豊富なために淡水魚の個体数が多く、淡水魚の宝庫の一か所に数えることができる（飛騨川流域の魚類より）。